世界文化遺産 カンボジア アンコール遺跡 環境保全に向けた取り組み

ISO14001をベースに地域を巻き込んだ活動を展開

カンボジアの代名詞「アンコール遺跡」。1992年に世界遺産として登録されたアンコール遺跡は、巨大な石積寺院アンコールワットを中心に、寺院や王宮跡など99ヵ所の遺跡が東京23区に匹敵する地域に点在する。世界遺産の登録以降、国内外の観光客増加は大きな経済効果をもたらしたものの、一方で深刻な環境問題が表面化。カンボジアの象徴を守ろうと、アプサラ機構を中心に地域を巻き込んだ環境活動がスタートした。

観光客の増加で環境問題が深刻化

毎年、アンコール遺跡には国内外から多数の観光客が訪れる。その数は年間100万人。観光客の急激な増加は、地域の環境悪化という事態を招いてしまった。ゴミの大量堆積、観光バスやタクシーの増加による大気汚染、さらにはホテルの建設ラッシュによる乱開発･･･。深刻化する環境悪化に歯止めをかけるべく、今地域を巻き込んだ環境改善活動が進んでいる。活動の主体となっているのが、アンコール地域遺跡保護管理機構（通称:アプサラ機構）である。

アプサラ機構は、環境活動推進の切り札としてISO14001に注目し、「認証取得プロジェクト」を2003年に立ち上げた。試行錯誤の末、2006年3月にJQAよりISO14001の認証を取得。世界遺産で初めてISO14001を取得するという快挙を成し遂げた。認証取得までこぎ着けることができたのは、「カンボジアの象徴であるアンコール遺跡を自分たちの手で守ろう」という職員一同の熱い思いがあったからにほかならない。

ISO14001をベースに幅広い環境活動を展開

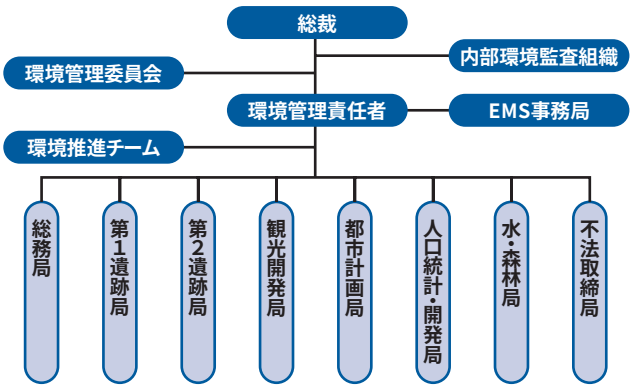
アプサラ機構が推進する環境活動は非常に幅広い。個々の環境活動に関して環境マネジメントシステムを適用し、事務局と8つの関係部署が連携しながらPDCAサイクルによる管理が行われている。ここで主要な環境活動を紹介しよう。

まず、森林保全の観点から力を入れているのが植樹活動。植樹用の苗に使用する肥料は落葉が主体で、育った苗の落葉を有効活用してまた新たな苗を栽培するという循環サイクルの確立をめざしている。

また、最近深刻化する大気･水質汚染対策として、汚染調査を2ヵ月に1回定期的に実施。大気調査は、特に汚染の激しい観光バスやタクシーの渋滞地域を選定して行っている。一方の水質に関しては、市内を流れるシェムリアップ川の上流･中流･下流でサンプル調査を実施。こうして収集されたデータは、具体的な活動展開に役立てられている。

アプサラ機構が最も頭を悩ませているのが地下水に関わる問題。遺跡群周辺の宿泊施設が、急増する観光客に

●アプサラ機構におけるEMS組織



アプサラ機構
（正式名称:アンコール地域遺跡保護管理機構）

1992年に世界文化遺産リストに登録する一つの条件として、ユネスコはカンボジア政府に「文化遺産の管理組織」の設置を要求。これを受けて、カンボジア政府は1995年、アプサラ機構を設立した。
アプサラ機構には、シェムリアップ州の5つの区域を管轄する権限が与えられ、関係省庁と連携して管理活動を実施。遺跡の保全修復をはじめ、地域の社会文化発展をめざした活動を展開している。

アンコール遺跡には、
年間100万人の観光客が訪れる

地域住民を巻き込んで植樹活動を推進

環境教育プログラムの一環として、
遺跡周辺にある売店で教育活動を展開

地域住民への
コミュニケーション活動

供給する水を確保するために地下水を大量に汲み上げており、遺跡を支える地盤が弱まる恐れが出てきているためである。現在、地下水に代えて、雨期に降る大量の雨水を有効活用するべく、アンコール時代に建設された貯水池（バライ）を利用する計画が進んでいるという。

身近な問題を教育テーマに 若い世代から環境意識を育む

アプサラ機構の環境活動の大きな柱として位置付けられるのが地域住民を巻き込んだ活動で、PDCAサイクルを通じて着実に成果を上げている。

特に若い世代から環境意識を育もうと、地域の小学校を対象に教育活動に力を入れて取り組んでいる。子どもたちに興味を持ってもらえるように、身近な問題を教育テーマに取り上げている点が特徴だ。

教育プログラムは、「校内の美化運動について」（対象は小学校4年生）、「売店周辺の美化について」（5年生）、「村の環境向上について」（6年生）の3ステップで展開。この中で、5年生対象の教育プログラムにある「売店」とは遺跡群周辺にある約1,000の露店や屋台をさす。実際に子どもたちの親や親戚が商売を行っているケースが多く、子どもたちを通じて大人たちにも環境に目を向けてもらうねらいがある。

教育の対象には、観光客も含まれる。特に正月や宗教儀式が行われる時期になると、国内観光客がどっと詰めかける。アプサラ機構では、事前にテレビやラジオ放送で、ゴミ捨て防止を呼びかけるほか、多くのカンボジア人に環境への意識を持ってもらう絶好の機会と考え、現地でも啓蒙活動を行い、普及効果をめざす。

世界遺産とISO14001。一見、関係性が希薄に見えるものの、アプサラ機構の取り組みに関して海外メディアの関心は高く、今後の成果いかんでは同様の動きが世界各国に波及する可能性も十分に秘めている。

アプサラ機構のメンバーに聞く▸▸▸

大切な文化遺産を次世代に伝えることが私たちの使命

アプサラ機構事務局の皆さん

今年5月、文化交流の目的でアプサラ機構のメンバーの皆さんが 来日されました。お忙しい中時間をいただき、活動状況などについて話を聞きました。

『ISO14001を導入して最もよかった点は?』

「アンコール遺跡周辺の環境をよくする」という共通の目的ができたことで、職員の意識が大きく変わり一体感も出てきました。また、PDCAサイクルという考え方は、日常業務にもプラスに作用していると思います。

『ISO14001の認証取得に向けて、最も苦労した点は?』

職員全員「ISO」という言葉さえ知らないレベルからのスタートだったので、必要な知識を得るのにとても苦労しました。一般職員にISO14001の考え方を理解してもらうためには、まず教育する立場である事務局スタッフがわかっていなければなりません。勉強をはじめるにあたり、規格や解説書をカンボジアの母国語であるクメール語に翻訳する作業に骨が折れましたね。

現状、職員全員がISOの考え方を十分理解しているというレベルにはまだ達していないため、引き続き教育に力を入れていく方針です。

『環境活動の中で、特に重視している部分は?』

すべての活動が重要なのはもちろんですが、中でも私たちは外部コミュニケーションを重視しています。なぜなら、環境に対するカンボジア人の意識はまだまだ浅いのが実情だからです。

特に、大人に環境活動の大切さを納得してもらうためには、子どもとは違ったアプローチが必要になります。遺跡群周辺の売店の皆さんには、「環境が悪化すれば観光客が来なくなり、売上に影響しますよ」と繰り返し説明しながら環境活動の大切さを呼びかけています。啓蒙活動の一環として、ゴミのポイ捨て防止を呼びかけるポスターを作成しているのですが、売店の担当者のほうから「ぜひうちにも貼らせてほしい」とお願いされるケースも見られるようになりました。ポスターをご覧になった観光客が意識するようになったせいか、遺跡周辺のゴミは以前よりも確実に減っています。

『今後の目標は?』

カンボジアの一大観光地であり、大事な文化遺産でもあるアンコール遺跡を守り、次世代に継承していくのが私たちの使命。引き続きISO14001をベースに、地域を巻き込んだ環境保全活動にまい進していきたいと考えています。

今回の来日では、日光や白川郷など日本の世界文化遺産を見学し、「日本ではきちんとした仕組みに則って保全活動を行っている」という印象を強く受けました。私たちが活動を推進する一つの知恵として、ぜひ学ばせていただきたいと思います。

今後は、遺跡周辺の利害関係者であるホテルやレストランにもISO14001の導入を働きかけたいですね。ISO14001が普及することによって地域全体が一つになり、私たちの取り組みが真の世界文化遺産を守るための一大モデルになれると信じています。